

二次元ぶち文庫

試し読み版

空蝉

表紙イラスト：秋月からす

フェリーシア  
エルフの守人

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『フェリーシア エルフの守人』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# フェリス

エルフの守人

空蝉

表紙 / 秋月からす

## 登場人物紹介

Characters

---

### フェリーシア

聖なる森の守人であるエルフの少女。閃光魔術などを操り、一族の住処を脅かす盗賊たちと闘っている。

うつそうと草木の生い茂る、緑に覆われた森林。昼には強い陽光を遮り、夜には住人に静寂の眠りを与えてくれる森の切り開かれた路を、一人の見目麗しい娘が闊歩していた。「ふん……。人間たちは、今日は来ていないみたいね」

周囲を警戒するように見渡す瞳はエメラルドグリーン。腰まで伸びた美しい金髪と長くピンと尖った耳が特徴的な彼女は、森に住むエルフの一人だった。肩先から膝下までを薄手のローブに包み、魔力を高める銀製の胸当てと額にはティアアラを装備している。

少女の名は、フェリーシア。一族で最も魔術に秀で、森の守人として日々侵入者との戦いに明け暮れる、エルフ族唯一の戦士だ。すらりと伸びた長身が凛々しくも勇ましい。一見スレンダーに見えるが、よくよく観察すればゆったりとしたローブの下に息づく肉感的な肢体を発見することができらるだろう。

「ふう……。今日も新鮮な空気をありがとう」

木々に掌で触れて語りかけ、深く息を吸う。そうすると乳肉がローブを盛り上げて弾み揺れるのだが、周囲に誰もいないことを確認したばかりなので心配はしていなかった。そう、今少なくともこの近くには森への侵入者——忌まわしき人間どもはいない。

（森を切り開き、奪う人間。あまつさえ連中は、私たちエルフを奴隷と称して攫うッ！）怒りに震える拳をどうにかもう片方の手で押さえて、フェリーシアは再度深呼吸を行った。木々が与えてくれる心地よい空気と静けさが、感情の起伏を徐々に沈めていつてくれ

る。森は、彼女たちエルフにとって母にも等しい存在だった。だからこそ、余計に住み処を荒らす異邦者たちを許すことができない。同族を奪われ数を減らしつつあるのも、美しい顔立ちと魅惑的な肢体を具えるエルフの娘を、人間の盗賊たちが攫っていくからだ。

攫われた娘は、二度と森に戻ってくることはない。死んだのか、それとも人の下で飼われているのかさえ、森の外へ出ることを禁じられた一族には知る術がないのだ。

——がさつ、かさかさつ。

(……ッ!? この匂い。……獣肉の臭みに、鼻が曲がりそうな鉄の臭気。……人間ッ!)  
耳の良いエルフの戦士は、かすかな草のざわめきを鋭敏に感じ取り、音のした方向を見定めた。掌に魔力を集中させ、警戒を解かぬままに身構える。静寂に満ちた森を穢す者ども——人間はその直後に姿を見せた。

「今日はぜってえに捕まえるんだ。それも最上級の美女をだッ。わあってるな!」

「へいっ、お頭。ひひっ、捕まえたら、お頭の後でいいっすから味見させてくださいよ」  
野卑な笑い声を上げ、下卑た会話に華を咲かせる男が二人。間違いない、エルフをかどわかしに来た連中だ。美しく健気に咲いた草木を平気で踏みにじりながら歩く男たちに、猛烈な怒りが募っていく。

「そこまでだ。卑しい人間。下衆どもめっ……喰らえ……ッ!」

——ジュバババアアアアッ!

戦士のかざした手の甲から光が溢れる。五指にみなぎった閃光が、左舷四十五度の位置に顔を出した男たち目掛けて一斉に放たれた。

「な、ななあぁッ？ 魔法、だとお！ 畜生、エルフの術使いかぁッ！」

「ひいいつ、ひ、ひいやぁ！ お助けえ！」

禿頭のリーダー格らしい男が驚愕の瞳で、閃光の先に立つ美女を見つける。一方、手下らしい若い男はすでに尻を向けて追尾する閃光弾から逃げ惑っていた。

「逃げてても無駄だつ。縛鎖の光よ、忌まわしき外敵を捕らえよッ！」

術者の命に従い変化する光の帯。閃光は瞬く間に二人の男を取り囲み、大柄な体軀を縛りつけていく。大きく距離を離れた人間の男たちに、術士に抗う術などありはしない。

「畜生！ くそがああぁッ！」

光に囚われ草の上に倒れ込みながら盗賊の頭が粗暴な雄叫びを上げるも、フェリーシアは気にも留めずにいた。所詮は負け犬の遠吠え――。忌まわしい外敵を捕獲したことで、確実に高揚し昂っている自覚がある。エルフの戦士は全身の警戒を解かぬまま、ゆつくりと捕縛した敵へと近づいていった。

「貴様らがするように、無闇に殺しはしない。だが、二度と森へ入り込めぬよう、一族の者を奪った報いはその身で受けてもらうぞ……！」

かざした拳に力がこもる。日焼け一つない白磁の指先が、再び輝きに満ちていくのを、

相対した盗賊の頭が観念したように見つめてくる。ついに一族に災いをもたらす憎き宿敵を一部とはいえ捕らえ、ささやかな復讐を遂げることができるのだ。

そうした負の感情に、囚われすぎていたのかもしれない。だから、背中側から、もう一つの臭気が近づくのを見過ごしてしまった――。

「クク、おい、今だッ！」

――ガチャンッッ！

「な、何ッ!? う、あああああ――ッ！」

盗賊の声に慌てて緊張を取り戻そうとした瞬間、首筋に電流が奔った。目も眩むような衝撃に全身を灼かれ、崩れ落ちる視線の先に、ニタリと笑うもう一人の男が立っていた。

「へへ、やったぜ。その首輪さえ嵌めちまえば、もうこっちのもんだっ」

（首輪……だと……? そ、んな……）

脱力するまま重力に逆らえず倒れ伏す。膝はカクカクと笑い、腕はまだ痺れが相当に残っている。それでも頭の中で反響する『首輪』という言葉に、自身の首筋に手を伸ばし、震える指先で触れる。手触りから純銀でできているらしいソレは、全体から仄かな魔力を打ちはなっていた。

「こ、れ……は……呪力がこもって……ううっ」

「ああ、ソイツは前に捕まえたお前のお仲間で作らせた代物だな。厄介な呪文の力を根こ



そぎ吸って封じ込めてくれるってえわけよ。符号となる言葉なしでは外れねえぜ」

魔力が失われた。その証拠に肉体は弛緩し、自力で立つこともできないほどの気だるげな疲労が全身を覆い尽くしている。そして目の前には縛を解かれた頭と、一歩後ろに二人の手下が顔を見合わせてほくそ笑んでいた。

「信じる……ものかつ。一族の者が、貴様ら人間に手を貸したりするはずがないッ……」  
 「信じられない。いや、裏切り者の存在を信じたくなかった。確かに魔力のこもった装具を作るには、呪文に長けたエルフが必要となる。これまで一族にも十数人いた魔法を扱える者はある者は捕まり、ある者は<sup>なぶ</sup>鬻り者の末命を散らし、今やフェリーシアただ一人になつていた。中には穢れた我が身を儚んで自ら命を絶つた者もいるという。

「信じる信じねえはお前の勝手だがよ。俺らにとっちゃ厄介な呪文が、もう使えないってのは紛れもない事実だぜ、エルフのねーちゃんよお？」

「信じるものか、そんなこと……認めないッ！」

拒絶と否定の態度を崩さないエルフに肩をすくめ、盗賊の頭がゆつくりと無精髭だらけの面を近づけてくる。鼻先に漂う獣肉と強い酒気が、フェリーシアを悪酔いさせた。

「じゃじゃ馬が過ぎる牝に、まずは従順を仕込んでやるよ。おら……舌を出せッ！」

「あぐぐうっ……離せ、外道ッ！ 意地汚く貪欲な卑しい人間め……！」

酒臭い息もかかるほど近づきしゃがんだ男の手が、女エルフの顎にかかる。そのまま力

じ開けながら捻じ込まれた。

「おっ、おお！ 小つちえ口の中が締めつけやがる。頭あ、コイツ最高ですぜ……ッ！」  
 ねつとりと熱くぬめる口腔内部を股間の肉棒で感じ取り、男が感嘆の声を漏らす。これまでに経験した人間の女やエルフの娘の誰よりも、目の前のエルフの唇は口淫愛撫に適した温度とぬめり、何よりも狭さを具えていた。手下の経験を知っているからだろう、盗賊の頭がチツと舌打ちしたのが聞こえてくる。

そうした男たちの思惑とはかけ離れて、清廉な女エルフはただただ苦痛に喘いでいた。

「んやああ……んぼおっ、おごっ！ げふつ、げふふおおっ……！」

口中に広がった圧倒的な質量に、顎が外れそうなほど押し開かれる。口中に充滿する腐臭も凄まじく彼女の心を苛んでいく。鼻を摘まれ口を塞がれたことで、肉棒との隙間からわずかに外気を吸い込むことしかできない。牡の吐き出す先走り混じりの唾液を仕方なく嚙下し、はぷはぷと無様に空気を求めて唇を蠢かせる。

「んぶう……ひゃ、ひやらあ……おぶっ！ くさいい……はぶぶぢゅううっ！」

「勝手に口を離すんじや、おおう！ ねえ……ぞおッ！」

——ぢゅぶぶうッ！

強引に押し込まれた牡肉の燃えたぎる熱に驚いた舌先が引つ込められると、脈打つ肉棒はますます増長してより奥深くへと突き入れられていく。肉勃起が先の割れ目からだらし

なく先走りの汁を嘔き零すと、苦い味わいが口の中一杯に広がっていった。

「ひゃぶっ！ ふうんっ、あぶう！ ぐぢゅっ、はぶぶぶううう……ッ！」

「おおらあ！ ベロをもつとカリに絡めるんだよっ、おほおおう！」

仰向けで首だけを持ち上げたフェリーシアの口腔目掛け、眼前に座り込んだ男が激しく腰を振るう。悪臭の酷い肉棒の雁首には、びっしりと白いカスが——恥垢が大量にこびりついていた。臭気の原因であるプニヨリとした感触のカスを舌尖に感じ、喉の奥から酸っぱい胃液が込み上げてくる。

「吐くなよおッ！ 口から俺のちんぽ吐き出したりしやがったら、てめえの一族全員皆殺しにしてやるからよおッ！」

えづくフェリーシアの口腔で恥垢をこそげ取るかのように、凶に乗った凌辱者は激しい腰使いでエルフの唇に硬い切っ先を擦りつけてきた。

男の脅迫に、エルフの守人は悔しさを胸に秘めつつも、大人しく従う他ない。暴虐の限りを尽くす肉棒に、命じられたとおりに舌をおずおずと伸ばす。灼熱のたぎりで存在を主張する牡の欲望に怯えながら、チロチロと舌尖を這わせていった。

「糞ッ。魔法は俺が喰らったので最後かよ。……せっかくの初モンを一つ、みすみす食い損なつちまったじゃねえか」

「ヒヒ、まだ股の穴が二つ残ってるじゃねえっすか。口マ○コも使ったことないんじゃ、

きつと股座も未使用に違いねえですぜ」

遠くでお預けを喰らつた男たちが猥談に華を咲かせている。自身を批評している屈辱的台詞をまるで他人事のようにぼやけた頭で聞き流しながら、ただただ口内に広がる苦みと嫌悪感に耐えていた。

(くっ……耐えてみせるっ。ケダモノの暴行になど、反応してなどやるものかっ……)

必死に嗚咽と声を抑えて堪えている間にも、男の腰は一時たりとて止まりはしない。つるりとした歯の表面や歯茎を肉棒でゴシゴシと扱かれれば、ぼろぼろと剥がれ落ちた恥垢が口中の至る部位に貼りついていく。

(うう、臭い！ こんな屈辱に、いつまで耐えればいいのか？ あう、ううああ……！)

うつすらと瞳の端に浮かんだ一粒の悔し涙が、男の目に留まりはしないか、自尊心の強い女エルフにとって最大の気がかりであった。

「ぐくう！ もつとだ、もつと丁寧な俺のちんぽをベロで洗うんだよッ、そらそらあ！」

——ガッツ、ガッツ！ ガツンッ！

「むぐふううっ！ うぐんんう！ んふう……ふう、ぢゅぽぽお……ッ！」

激しい抽送に八の字を描くような回転が加わり、口の中で溜まった唾液と牡のエキスがかき混ぜられる。混ざりあつていく牡牝の体液の味わいに、フェリーシアの強固であったはずの意識は徐々にぼんやりと薄れ始めていった。

「堪んねえつ、堪んねえ！ 最高だぜこの牝の口マ○コはあッ！ うはつ、うははッ！」

——ガズウンンッツ！

「むぶぶううう！ んふああ……！ いひやあつ、あぶつ……んぼおおおおおッ！」

喉奥に擦り当てられた肉棒の突端がぶわりと大きく膨れた——そう感じた次の瞬間に、  
 牡肉の先から濃厚な欲望汁が噴き上げる。

——ぶびいいいッ！ びゅぽぽつ、どぶどぶどぐぐつ！ びるつ、びぶぶびゅうッ！

「んぶふおおつ!!」

「離すんじゃねえ！ 一滴残らず吸うんだよッ！ おらッ……飲めえッ！」

髪を掴まれて男の腰骨に、根元に生えた陰毛に鼻先が埋まるほど押しつけられた。ドク  
 ドクと震え汚濁を吐き散らし続ける肉勃起の脈動を唇で敏感に感じ取りながら、無理矢理  
 に喉奥に白い汚濁を注がれる。

「いはあああつ！ はぶつ、ぶぶぶぶつ！ んんぐくうう——ッ！」

次々と吐き出される汚濁の量は凄まじく、瞬く間に口内をむせ返る牡の匂いと欲望の証  
 である粘液で埋め尽くしていく。

（嫌アッ！ 私の口が汚らしい人間の男に穢されてる……！ 臭くて汚い、粘つく汁が一  
 杯注がれてええつ……）

舌の上をドロリと滑りながら溢れ返った汚濁液を吐き出すことも許されず、鼻を摘まれ

す。持ち主の意志とは無関係に秘薬で強制開発された乳腺は、卑しいほどの貪欲さで快楽のみを求めて全身の快感中枢を刺激し、暴れ回っていた。

「お、お頭ぁ、混ぜてもらっていいっすか。……へへ、口マ○コいただきまあす」

「お、おい、口は俺がっ……くっ、なら俺は手でコかせてやる」

散々に淫態を見せつけられた手下どもが、白濁のミルクの甘い香りに誘われるように汗と汗にまみれた白い肌に襲いかかってくる。

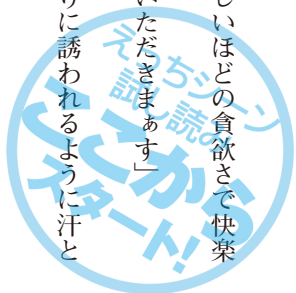
「んぶぢゅぶうっ！ んはっ、はぁ！ あむぢゅるるう……ッ！」

口中に乱暴に突き込まれた牡肉の苦い味わいに、フェリーシアは覚えがあった。正確には身体が覚え込まされている。これは、初めて唇を犯した、あのペニスだ——！

「ひひ！ お前の口を最初に犯してやったちんぽだっ！ お前に男の味を仕込んでやったちんぽは美味いか、あぁ!？」

優越に浸る男の声が頭の上から響いた気がする。だが、そんな些細なことは、もうどうでもよくなってしまっていた。今はもつとたくさんの快楽に溺れて、熱に溶かされてしまいうまでドロドロの牡の欲望を受け止めていたい。気高さも誇りも奪い去られ、もう残っているのは牝としての本能だけなのだから。

（これ以上、我慢できないもの……！ あぁ、もうだめなのおっ……。もう、私には……森と話す力も、仲間を守る力もない……ッ！）



諦念と淫樂と絶望がない交ぜになって非力な一匹の牝を追い立てていく。一族のため。その一心で張り詰めていた心は力ずくで手折られ、ぷつぷつりと途切れた。そして無意識下で抑え込まれていた情欲が、この好機に我先にと胸の奥から飛び出してきた。

「くおおっ、急に締めまりがよくなりやがった！ クク、ウヒヒヒッ！」

パンパンと小気味よい肉と肉のぶつかりあいを奏でる男のリズムが、目に見えて速く、鋭く激しくなった。肉の唇を掻き回されて、溢れた蜜がブジュブジュと泡立つ。すぎる壁を引き剥がされ突き放す牝の身勝手な抽送に、それでもすがりつくことをやめられない。

（おかしくなるっ……頭の中エッチなこと一杯でええッ！ もう、もう私いつ！）

葛藤している。心がこのまま堕ちてゆくのか、それとも踏みとどまるのか。その狭間で揺れ動いていた。きつと、最後の障壁だ。ここを過ぎれば、もう後戻りはできなくなってしまう。

「おお、キレーなお手手できゅっ握るんだ。シコシコ手首動かせっ……おふうおお！」

「あ、熱い……！ おちんちん、すぐく熱いのおっ！」

直に手で握り締めた牝の熱が、少しだけ心を淫樂の側へと傾けた。髪を掴まれて振り向けないが、掌に感じる熱と脈動で男の興奮は充分以上に伝わってきた。又チュ又チュと湿った水音が響いているのは、肉棒が先走りの雫を漏らしているからか。

「おふう……唇ももつと締めろっ……括れをきゅっきゅっ握るんだよおっ！」

「んぼぼおおお……はぶっ！ んふう、ふあ、あふうう……ふわあ、いいい……」

屈辱的な命令にも恭順する。舌先を尿道口に添えて、唇をキュツと窄めた。剛直が小刻みに振動し、口中に広がる苦みがより濃くなる。また、心が淫堕の淵へと近づいた。

「おい、てめえの名前は何て言うんだっ？ 教えるんだっ、この牝牛イツ！」

それまで歓喜の狂笑を浴びせながら腰を叩きつけてきた頭領が、唐突にピストンを中断して語りかけてくる。要求された事柄の重要さを理解して、快楽に没頭しようとして口淫に勤んでいたフェリーシアの心に動揺が広がっていく。

「はぶっ、んじゅじゅっ……んぷう!! そ、それはっ……」

頭領の意図を汲んで、一旦口腔を埋め尽くした肉棒が抜き取られる。一刻も早く暖かな口中に戻りたい牡肉は焦れたように亀頭での頬打ちを繰り返す。ネットと濡れた突端の感触と突っつかれるたびに鼻先を漂う濃い牡の臭気に、まるでこちらまで焦らされている気分になって、無意識の内に舌を突き出して物欲しげな貌をしてしまっていた。

「言うんだよッ、おら！ 男三人に囲まれてヒイヒイ喘いでる牝の名前を教えろ！」

「はぐっ、ううううッ！ ひはあつ！ ゴ、ゴリゴリしないれえッ！」

急かすようにみつちりと密着した膣内を動き回る剛直。硬く勃起した、けれど弾力に富んだ切っ先が無防備な女を中心——子宮の入り口をこれでもかと突き上げてきた。切ない疼きが腰骨で蔓延し、やがて全身へとじつくり浸透していく。



男は、きつと知っているのだ。エルフが名を教えるということの意味を。通常名で呼ぶあう習慣のないエルフ一族において個々の名を知らせるということは友愛の証。深い信頼の証拠であり、異性間では愛の告白にも等しい意味合いを持つのだということ——。

（き、気持ちいいのが欲しいのおつ、ああ、でも名前は。名前だけはあつ……）  
「へっ、これでも教えないつもりかあ？」

「……ッ！　そ、そこおつ……あひいんンッ！　ひひやつ、やつ、やはあおおッ！」

頭領の手が女エルフの尖った両耳を掴みクニクニと撫で回す。くすぐったさと同居した優しい手つきの愛撫に、悦楽に浸されてしまった娘の抵抗は容易く瓦解した。

「フェ、フェリーシア……フェリーシアで、す……うん！　早く、気持ちよくしてえ！」

「クク、よおし、フェリーシア。好きなだけ突きまくってやるッ！　イケ、遠慮なくイッチまええええッ！」

——ずぶうッ！　ぶぢゅッ！　ぢゅぷふん！　ぶぢゅぷふぷ！

頭領は耳を掴んだまま、腰の律動を再開させる。ただがむしやらに子宮口を突き回す、容赦のない快感のみを追求した抽送。そして、鼻先で待機していた手下の肉棒も、ようやくお預け状態を解除されて再び待ち焦がれる女の口内へと戻ってきた。

「おおつ……へへ、もうすぐにも漏れちまいそお……ッ！」

「んぶぢゅううっ！　はぶっ、びちゅるっ！　んふ、ふああん……ぢゅぽぽっ！」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**